



ICT 海外ボランティア会会報

No. 68

2016年11月4日(金)

Home page : <http://www.ictov.jp/>

e-mail : info@ictov.jp

目次

◆特別寄稿

三分の一の設計人員で工事はやれる

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝氏

◆海外グラフィティ

マイ・フェア・レディ

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆近代農業への挑戦

竹田竹炭米のブランド化にむけて

元スリランカテレコム社長 阿南 修平氏

◆現地便り

ミクロネシアの人と暮らし (ミクロネシア便り 2)

新東京医科大学医学部 医用工学教室 教授岡田 一秀氏

◆第 25 回 海外情報談話会模様

事務局

◆第 26 回 海外情報懇談会 開催のお知らせ

事務局

三分の一の設計人員で工事はやれる

ICT 海外ボランティア会顧問 石井 孝

【真藤 恒氏語録】

パターン・モジュールという概念で、システムチックに整備された設計のシステムを持っていれば、計画不良などというくだらないものは出てこない。多人数の目のおった、リファインされた内容で組み立てられていく設計になるから、パーソナル・エラーなどは出てこない。

設計の三分の一は工事番号に張り付く人間、三分の一は従来の機種種の改善あるいはパターン・モジュールの進歩改良、あとの三分の一は明日の機種種の勉強、つまり開発にまわさなければならない。

いままでのやり方を一步でも二歩でも良くしようと努力する、そして、それだけの成果を上げていくというのが仕事である。同じようなことを繰り返しかえしていくようなものは仕事ではない。夢がないからそうになってしまう。

年がら年じゅう同じような繰り返しをやっていていやだと思わないのだろうか。なんのために世の中に生きている人間か、ということ意識する必要がある。

それがなぜわからないかという、企業人である前に社会人であるということが、腹の中に入っていないからである。

【石井 孝氏のひと言】

「日々前進、しかし、それは着実に」これが真藤イズムの仕事にたいする基本姿勢・スタンスである。

使いこんだ技術なり機能をモジュール化し、ユーザーの要望に応じたパターンを用意しておいて全体を組み立てる、そのような設計ができれば品質は保証されるし、コストもかからず製造もスピード化が図れる。

このような改革、改善は、組織の中に技術資産が着実に蓄積されるシステムが構築され、且つ、職員個人、個人のモチベーションが維持されてはじめて可能になる。

この考え方はハードに限ったことではなく、むしろ、ソフトウェアの場合こそ、より重要である。真藤さんは、ソフト部隊に飽くことなく、この趣旨の宿題を出しつづけた。ついに満足してもらえる答えはできなかったが、可なり前進はできた積もりである。

曲りなりにもこのような改善・改良が出来たのは、内製という形で仕事が自社内で完結できたからである。今、行われている多重構造的な下請け状態のソフト開発では、このような改革、改善は不可能である。何故なら、肝心の製品そのものを造り込む最終工程のコーディングの作業が派遣や外国では、発注側、受注側何れの組織にも技術は蓄積されない。

マイ・フェア・レディ

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智



東京芸術劇場のミュージカル「マイ・フェア・レディ」を観た。タイトルはつとに有名だが、過去、一度も映画でも見たことはなかった。日本で名が広まったのは、往年の名女優オードリー・ヘップバーン主演による同名の映画がそのきっかけだろう。

物語のおおもとを質（ただ）せば、ギリシャ神話「ピグマリオン」にさかのぼる。キプロス島の王であるピグマリオンは、現実の女性に失望して、理想の女性・ガラテアを彫刻した。命を吹き込まれたガラテアに王は恋をし、最後には妻にしようというストーリーだ。そ

の後、19世紀末のイギリスで詩劇に取り上げられたりしたが、決定的になったのは、アイルランド生まれのノーベル賞作家・バーナード・ショーの「ピグマリオン」で、マイ・フェア・レディの下敷きとなっている。その後、上演されているものは、アメリカ人の脚本家のアラン・ジェイ・ラーナーのミュージカルである。

物語は、1920年ころのロンドンが舞台。ロイヤルオペラハウスの近くで下品な下町言葉で花を売っているイライザがふとしたことで、近くにいたインド帰りのピッカリング大佐と言声学者のヒギンズとの賭けに巻き込まれる。その賭けとは、音声学者のヒギンズが6か月以内のイライザの言葉を矯正して、立派なレディーに仕上げ、舞踏会に連れて行くというもの。

ヒギンズの猛特訓の末、見事にレディーに変化したものの、芽生えた恋愛感情や、階級間の葛藤などで、結末はバーナード・ショーの皮肉たっぷりに「Happy Endでは終わらないかも」と見る者の想像に任せるストーリーとなっている。

劇中、印象に残ったのは、2つある。一つ目は、コックニーと呼ばれるロンドンの労働者階級の英語で、これが、「オーストラリア英語」にそっくりである。劇ではもちろん日本語で翻訳されてはいるが、一つだけ例を挙げるとエイと発音すべきところ、アイとなる。ニュースステーションでオーストラリアロケの時、「木曜島」のホテルマンが5月のMayを（メイ）でなく（マイ）と発音していたのを今でもはっきり覚えている。二つ目は、舞踏会のリハーサルに赴いたアスコット競馬場で、話題は「天気と健康」に限るという忠告のもとに、ロンドンの天気でなく、練習用のフレーズ「スペインの雨は主として平野に降る」と言ってしまった。まさに落語で、大家さんに言い方を教わる八つつあん、熊さんみたいで、なコミカルな部分がある。

「道で花を売る花売り娘から、花屋の店員になるには、その言葉から直していこう」と決意したイライザの心のうちには、その当時のロンドンの状況を反映していたのかもしれない。そして、冒頭でヒギンズ教授が語っている次の言葉が、この物語のテーマかもしれない。「問題は言葉、汚い服でも顔でもない。階級を隔てる言葉の壁。話し方で人を差別し、話かたで人をさげすむ、その壁は崩せぬものか」（講座「マイ・フェア・レディ」英潮社より）

竹田竹炭米のブランド化にむけて

元スリランカテレコム社長
阿南 修平

まえがき



2013年6月に、故郷である竹田に戻って、先祖の田んぼで、現在稲作を行っています。人生の終わりの章において、無性に稲作に挑戦したくて、ホーチミンから帰国後、すぐに故郷の田んぼを見に行きました。昔と変わらない田んぼや風景をみつめながら、先祖はこの田んぼで、農機具のない時代、大変苦勞しながら、稲作を行っていたのだらうなと思いを巡らし、農作業の準備をゼロから始めました。今年は、稲作3年目になり、田んぼの広さも小作も引き受けたために、倍の広さになり、稲作作業に悪戦苦闘しているところです。この度、「竹田竹炭米のブランド化」についてICT海外ボランティア会会報への投稿依頼をいただきましたが、何分、進行形の状況であり、完成されたものではありませんので、途中経過報告になります。よろしくご理解のほどお願い申し上げます。

1. わが故郷竹田市

私の故郷は、大分県竹田市というところで、あまりご存じではないかと思いますが、「荒城の月」を作曲した瀧廉太郎が、育ったところです。瀧は、竹田の岡城をイメージしながら、荒城の月を作曲したと言われ、それにちなんでJR九州の豊肥線の豊後竹田駅を降りますと「荒城の月」が流れます。朝6時には、「荒城の月」のメロディーが市内全域にスピーカーで流れます。さらに、田能村竹田も竹田出身で、江戸後期の南画家として有名です。ロシア通として軍人の広瀬武夫中佐の故郷であり、旅順港の功績をたたえられ、広瀬神社があります。四方を山で囲まれ、北には、久住山、南に宮崎県との境界に祖母山が、また阿蘇の外輪山に面しており、風光明媚な場所で、百選にも選ばれる水が豊富に湧き出ているところです。久住や長湯に温泉が豊富に湧き出て、沢山の観光客が来られます。竹田市の特産物としては、日本一の生産量を誇るサフラン、さらにカボス、シイタケが有名です。



岡城の壁

2. 竹田竹炭米の推進経緯

田舎に戻り、小作家から戻していただいた広い田んぼを見ながらどうしたら米が作れるのか、思いあぐんでいました。単に、種もみを田んぼに播けばいいのだろうか、田んぼを掻く必要があるのか、草が生えてもいいのではないかなんて簡単に考えておりました。季節は冬、稲株の残っている田んぼを見ながら、何か自分で行動を開始しないといけないと思い、稲作に関してネットでいろいろ調べはじめ、併せて必要と思われる農器具の準備も開始、農機具の保管や、稲作資材が保管できるように、納屋を大改造しました。

竹田市の方で、竹炭を使用した稲作方法のセミナーが2013年11月に開催されたので、それに参加、面白い稲作なので、竹炭米を作りたいと思っていたところ、市の方で、「竹田竹炭米を、作ってくれんかな」という要請がありました。

事業活性化推進室の音頭で、「竹田竹炭米研究会」が2014年1月に正式に発足、稲作経験のない私が座長に指名され、3月には、市長を会長とする「竹資源を活用した農産物・畜産振興推進協議会」が発足、副会長に指名され、本格的に「竹田竹炭米研究会」が動き始めました。他研究会メンバーの方々は稲作に経験があるけど、自分は全く経験がないなか、企業でもない、自主的な集まりをいかにまとめるのか大変なスタートでした。

幾度となく研究会を進めていくと、意外と、他メンバーも稲作方法の重要なことには知らないことがわかり、自分の方で、塩水選別、温湯処理、なぜ竹炭や、竹粉の効用について調べ、一緒になって勉強しました。竹炭や、竹粉を製造するために、5～6人で竹林に行き、大掛かりに、チェーンを使って竹の伐採を行いました。生竹は燃えないと思っていましたが、本当によく燃えます。竹炭の生産方法では、最初に大きな炭窯を使用、その後、ドラム缶を使用しましたが、いずれの方法も短期間に大量に生産できないので思いあぐんでいたところ、地面に大きな長方形の穴を掘って、竹を燃やす方法に出くわし、この方法によって大規模に炭を生産することになりました。

その後、長方形の穴を掘るのは大変だから、穴を掘らずに田んぼの平地で、竹を燃やそうということになり、今では、この方法で竹炭を作っています。竹炭米なので、炭をいかに短期間で大量に作るかが大きな課題でしたが、極限状態になると結構いろいろなアイデアが出てくるものだと驚いた次第です。一方、竹粉は、竹粉碎機を使用すれば、一日に、1.5トンほど生産ができるので、竹炭や、竹粉を研究会メンバーの田んぼに鋤くことができるようになりました。

2014年米は、秋に収穫ができ、パンフレットを作成、さらに商標登録を行い、生産物保険にも加入、販売を開始しました。店頭販売の消費者の反応や、販売の体制、課題を鑑み、2015年米は、かなりハードルの高い、無農薬・無化学肥料の竹田竹炭米の生産を開始、2016年米は、現在生産中ですが、かなり無農薬米の生産に手ごたえを感じているところです。

3. ユニークな稲作方法

竹田竹炭米の生産方法は、田んぼに、竹炭、竹の粉（竹を粉碎し、粉にしたもの）、それと米ぬかを、田んぼに鋤き込み、微生物による土壌改良が基本です。この竹粉は、密封した袋に保管、2～3ヵ月後に、乳酸菌発酵をします。それを田んぼに播き、微生物の活性化を期待するものです。

自然の力を利用し、田んぼにも優しい稲作農法です。勿論、この方法は微生物の活躍を期待しますので、除草剤等による農薬を散布してしまうと、微生物の活性化が失われますので、農薬を併用する訳にはいきません。したがって、水田の除草を行う必要が生じます。手作業による除草作業のため大変な労力を必要とします。全く江戸時代に逆戻りの感があります。



生竹の燃焼



破砕機による竹粉

4. 竹田竹炭米の生産・販売の変遷

竹田竹炭米の生産は、前述のように自然の力を期待したものでありますので、雑草の影響は避けられず、収穫高に、大変な影響を受けます。収穫したお米は、メンバー各人が直接、消費者に販売する形態を採用しています。竹田竹炭米の品質は、農薬や化学肥料に頼らないお米としており、結構ハードルが高いものですが、消費者の要望、竹田という地名を冠とするブランド米であることを鑑みると、やむをえないと思っています。

2014年米では、農薬使用・不使用に関係なくメンバーのお米を集めて、大手の食品販売店で販売をしましたが、

- ①店頭販売のため、商品の手配・撤去、運搬等の膨大な作業量、
 - ②農薬への厳しい消費者の目、
 - ③高価格帯のお米であったこと、
 - ④2015年米の生産活動が始まった
- 等により店頭販売の継続を中止しました。

2014年米の経験から、竹田竹炭米2015年には消費者の嗜好に合わせて、農薬や化学肥料に頼らないお米作りを、少しの規模でよいからと、メンバーにお願いしましたが、今までの農薬使用の方法から抜け切れず、なかなか大変そうでした。私の方は、直播、無農薬・無化学肥料のため、雑草が多く、大変な除草作業が続き、収量が大幅減少しました。



大型店での販売促進

2016年米も同様に、無農薬・無化学肥料による竹田竹炭米の生産を総会の席上で会員にお願いしましたが、どうなることでしょうか。

私の稲作方法は、他の会員と異なり、最初2年間は、種もみを「鉄コーティング」した直播による稲作でした。しかしながら本方法では、無農薬のため雑草対応には向いていないと判断し、16年米は苗箱による育苗方法に大きく転換しました。苗を移植する田植えは初めての経験で、塩水選別・温湯処理・浸種・催芽・苗箱への播種・田んぼでの育苗そして田植えを行いました。

プール育苗という方法を最初は採用しましたが、地盤が水平でないため、水位差ができ、各苗箱の稲の成長にむらができました。慌てて、追加の育苗準備をして、使用可能な苗箱とともに急遽、整地した田んぼに持っていき、シートを掛けました。

さあ田植えだと、田植え機を購入して田植えを行ったところ、ほぼ田植えが終わるところになって、苗が連続的に移植されていない個所が多発していることに気づきました。最初は苗や田んぼの水が多いせいかなと思っていましたが、田植え機の苗掻とり機構の不整備が原因と判明、大変なショックを受けました。

1年に一回しかできない稲作、一生懸命作業をしてきたのにと悔しい反面、これも何かの勉強と、大きな収穫が期待できないかもしれないけど、昨年よりはましと、勝手にポジティブに解釈して、田んぼの作業を進めている次第です。

16年米の稲作農法では、竹粉による床土、複数回の代掻き、チェーン除草や水管理による雑草抑制等を行っており、無農薬・無化学肥料による竹田竹炭米の可能性を追求しているところです。さらに難しいかもしれませんが、安全米として、県の公的な認証確保にも挑戦しているところでもあります。

5. あとがき

4月14日と16日に襲った熊本地震において、阿蘇に近い、竹田市でも大きく揺れ、大変驚きました。おかげさまで、家屋、田畑には影響もなく、農作業に打ち込んでいるところです。2013年6月から田舎での稲作生活をはじめ、最近は少し、自信がでてきたかなという感じです。直接販売で、いつも購入していただけるお客様の顔を思い浮かべながら、安心・安全なお米を作らねばと精をだして頑張っています。お客さんから、おいしいというメッセージを直接頂くと、本当に励みになります。いままでの人生で全く経験できなかったことで、自分でものを作り、売るということが如何に大変か学んでいるところです。地域ブランド農産物として、「竹田竹炭米」の生産を軌道に乗せることができればなあと老体に鞭打って頑張っております。

残りの人生、自然を相手に、少しでも老化を遅らせ、健康が保てればと考えて、毎日、田んぼに行きます。乱舞する赤トンボのなかで、稲穂をみるとやっどここまで育ったなあと、うれしく思っている次第です。

ミクロネシアの人と暮らし（ミクロネシア便り2）

新東京医科大学医学部 医用工学教室 教授岡田 一秀

1. 国の構成

ミクロネシアは、左右に長い国であり、海城と言う点では、日本よりも遥かに広い面積にありますが、数千ある島を集めてみても、土の面積は非常に小さなものです。

西側から、ヤップ・チューク・ポンペイ・コスラエと言う大きな4州があります。前記2州は、日本よりも1時間、後の2州は、2時間先行します。

互いに、言葉が違うので、現地人どおしであっても、州が違えば、英語を介して話します。

2. 歴史変遷

1500年代からスペイン領→ドイツ領→日本領→アメリカ領→独立（30年くらい経過）と言う経歴を辿っています。

概して、南国特有の穏やかでのんびりした文化があります。何かイベントの時間も±30分程度の範囲内なら、気にしない範囲内です。ポンペイ州では、過去形・未来形・現在形の区別がない。（但し、明日や今日、何時間前と言う副詞句があるので、だいたい、意味は通じる）ポンペイ語が話されます。

3. 気候

一般的には雨量が多い土地で、年初は短い乾季と言われますが、スコールもあれば、1週間に及ぶ、長雨もあります。赤道に近い熱帯と言っても、海洋性なので、日本の内陸部の真夏のように、38℃とか40℃くらいに、暑くなることはありません。夏季に、日中、33～34℃であり、夕方から朝にかけては、どのシーズンも過ごしやすくなります。

4. 文化

常夏なので、花は年中咲いており、3～4色くらいのハイビスカスに加え、珍しい花もあります。

現地の人を買う、クルマの質（スクールバスを除いては、バスが走ってはいない事に伴うものだと思いますが、8割くらいは持っている）。生活は徐々に向上はしており、ほぼ、平均月収で、\$400前後のようです。

電化製品・電子部品だけは、高くて、日本の2～3倍くらいするので、よく、日本人などは、「1時帰国時、秋葉原で買って来て」と頼まれています。

5. 教育制度

大学は、私もSV時代、その通信工学科で、電子工学/情報工学を教えていた総合大学が1校・他に医科大学・法科大学・社会人大学などが少数あり、その下は、日本と同様、高校が、各地にあります。

どの学校も、5月の中旬から7月の中旬あたりの70日間は夏休みであり、冬休みも短期ですが、年末・年始の2週間ほどはあります。

6. 宗教

宗教は、カトリックが49%、プロテスタントが49%であり、元々、外国人も含め、共存共栄の気質と譲り合いの精神があるようで、宗教や主義主張を巡って、対立したり、差別がなく、まず、喧嘩・口論も、市街で見ることはありません。他国の状況を見るにつけ、そのような、人間関係に軋轢を生じない、平和が一番と感じます。

7. 日本からのアクセス

日本からの航路は、以前は直行便もあったようですが、グアムないし、ホノルル経由ということになります。ただし、乗り継ぎが悪いので、乗ってるトータルの時間が、7時間前後の割には、1泊付きで、移動に合計24時間程度を要し、往復で16万円前後（季節により±3万円）でしょうか。

第26回海外情報談話会模様

事務局

第26回海外情報談話会は、去る10月14日（金）NTTコムウェア本社会議室で実施されました。題目は「NTTコムウェアの状況と戦略」で、講師は海野 忍氏（NTTコムウェア株式会社 代表取締役社長）でした。参加者が大勢45名で、初めてこの懇談会に参加されて方も多くおられました。



講演の内容は次のとおりでした。

NTTコムウェアは、NTTグループ各社が利用するソフトウェアを開発することを主たるビジネスにすべく設立されました。NTTグループの中における位置づけ、これまでの業績、最近の戦略などを独特の分析手法を紹介いただきました。それは最初に社の過去を振り返り、どんな問題があったのか、その原因はどこにあったのかを分析されました。

次にNTTグループの中で弊社に課されたミッションを遂行する上での困難な状況を示し、それに対する対策を説明され、さらに長期計画の考え方、中期計画と将来目標を示されました。



また、現在実施されているマネジメント手法や、今取り組んでいる新ビジネスについての紹介あり、力強く結ばれました。

最後に、いくつかの展示についてそのデモンストレーションもありました。

第 27 回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催 ICT 海外ボランティア会

協賛 情報通信国際交流会

第 27 回海外情報懇談会は下記により開催されます。
参加下さいますようお願いいたします。

日 時：平成 28 年 11 月 24 日（木）午後 3 時～5 時

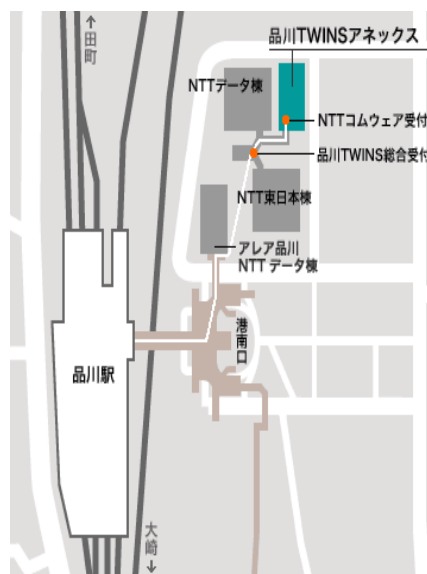
会 場： **NTT コムウェア本社 1 F 会議室**

（JR 品川駅下車 港南口改札口より徒歩 7 分）

（地図ご参照下さい）

東京都港区江南 1 丁目 9 番 1 号

NTT 品川 TWIN アネックスビル 1 F



題 目：

ネパールヒマラヤ山脈に住む人々を襲った大地震
—1 年間わたるコミュニティ FM 局復旧支援に従事して—

講演者： 鈴木 弘道氏

元 JICA シニア海外ボランティア（トンガ、ネパール）

概 要：

ネパールは大変な親日国で、今年は外交樹立 60 年の節目を迎えました。そこで昨年 4 月 25 日 M 7.8 の大地震が発生し、9,000 名近い犠牲者及び 100 万戸に及ぶ家が倒壊などの被害を受けました。

これに対し BHN テレコム支援協議会は 地震発生から 7 日後の 5 月 1 日から約 1 年にわたり現地の FM 局の復旧支援にあたりました。

人口 2,700 万人足らずながら、100 に及ぶ民族と 93 の異なる言語を持つ多民族多言語の国家です。公用語はネパール語ですが、地域の言語で放送する FM 局は、日本では考えられない重要な役割を担っているとのこと。

今回現地で復旧の責任者として支援に当たった鈴木氏から FM 局復旧支援に至った経緯や具体的な現地での被害や活動状況などを紹介していただきます。

鈴木氏は 2013 年 S V としてネパールで活動した経験を買われネパール支援にあたりました。BHN から協力要請を受けた時は、S V として次の任地、南アフリカへの派遣が決まっており、やや悩まれたものの、南アフリカ派遣の辞退を申し出て直ちにネパール支援

に赴いたそうです。

BHNテレコム支援協議会（BHN---Telecommunication for Basic Human Needs）を簡単に紹介します。1992年9月に任意団体として設立されました。設立動機は、1981年国連総会において電気通信が途上国発展に不可欠であると決議されたことでした。以来海外で発生した自然災害、最近の例ではフィリピンの台風被害に対し復旧に不可欠な通信インフラの回復支援や技術者の育成などに当たってきました。現在は国内でも熊本地震など大きな災害が発生していることから国内での災害支援にも当たっています。

参加：入場無料 お気軽にどうぞ！（会員制ではありません）

参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 kato2415@jasmine.ocn.ne.jp までご一報下さい。

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申し上げます。

送付先は、編集担当 加藤 隆 (kato2415@jasmine.ocn.ne.jp) , または

村上勝臣 (katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp) までお寄せ下さい。

編集後記

・ 阿南修平氏に「竹田竹炭米のブランド化」に向けた取り組みについて寄稿をいただきました。テレコムから竹炭米への挑戦は、私達読者にとって興味深く心躍る思いです。ご苦勞の連続かと推量しますが、持ち前の根性を発揮されて、遠からず成功されることを祈っております。

・ 前回の海外情報談話会は、講師にNTTコムウェア社長 海野忍氏をお迎えしました。社の経営方針を社員の皆さんと模索され、それに基づく実績を力強く紹介されました。質疑応答と相まって感銘深いご講演でした。

そして次回の談話会はBHNから派遣された鈴木弘道氏による ネパール地震災害復旧支援に現地で1年間に亘り活躍された生々しい報告です。現地の災害の様子は、かつて鈴木氏からの速報として当会会報の号外としてお報せしましたが、今回は一区切りのついた支援作業全貌の紹介です。ご参加をお待ちいたしております。 (以上 加藤)

・ 会報のナンバーについて私のPC故障で誤りがありました。前号は67号でした。お詫びして訂正させていただきます。

・ 石井さんの「真藤語録」 今回の話題は「三分の一の設計人員で工事はやれる」でした。その中で真藤さんの『企業人である前に社会人であるということ』という言葉が印象に残りました。

- ・ 田上さんの海外「マイ・フェア・レディ」寄稿していただきました。田上さんには次号にも寄稿して頂く予定です。ご期待ください。

(以上 村上)

総編集長：ICT 海外ボランティア会 事務局長 加藤 隆

編集長：ICT 海外ボランティア会 広報部長 村上勝臣

報道部長：ICT 海外ボランティア会 報道部長 山崎義行

発行：ICT 海外ボランティア会